

# 宜野湾市の沿革

## 位 置

本市は、沖縄県本島中南部の東シナ海に面し、北には北谷町、東には中城村、北東には北中城村、南東には西原町、南に浦添市と面しています。

那覇市より北に 12km、沖縄市より南に 6km の地点にあり、市内をドーナツ状に国道 58 号、国道 330 号、県道宜野湾北中城線、県道宜野湾西原線が通り、さらに沖縄自動車道の北中城インターチェンジ、西原インターチェンジへもつながりが容易な沖縄本島の中部及び北部を結ぶ交通上の重要な地点に位置しています。

**面 積** 19.70 平方キロメートル（平成 25 年 10 月 1 日現在）

**人口密度** 1 平方キロメートルあたり 4,869 人（平成 25 年 12 月末現在）

**世 帯 数** 40,603 世帯（平成 25 年 12 月末現在）

**人 口** 95,913 人（平成 25 年 12 月末現在）

## 歴 史

本市の母体である宜野湾間切は、1671 年（寛文 11 年）に浦添間切から我如古、宜野湾、神山、嘉数、大山、大謝名、宇地泊、喜友名、新城、伊佐、の 10 カ村を割き、中城間切から野嵩、普天間、そして北谷間切から安仁屋をそれぞれ割き、真志喜を新設し、14 カ村をもって設立されました。

1879 年（明治 12 年）廃藩置県後、沖縄県庁の支庁として中頭郡役所が普天間に新設され、続いて中頭教育事務所、県立農業試験場等の官公署が設立されるなどの本島中部の政治、経済、教育の中心地として活気を呈していました。

第二次世界大戦においては、本市も壊滅的な戦災を被りましたが、野嵩地区が消失を免れて、以南の戦闘地域の住民の収容所となり、他の市町村に先んじて戦後処理作業が行われました。その後、市域の主要な部分が米軍基地として接收され、基地の街としての性格を強めました。同時に普天間を中心に都市化が進展し、1962 年（昭和 37 年）7 月 1 日に市制が施行され、新生「宜野湾市」が誕生しました。現在、米軍基地が中央部に位置するため、市街地は国、県道沿いにドーナツ状に発展し、特異な形状を示しています。近年、那覇市の外延的な拡大に伴い、市街地化が進展しつつあります。更に沖縄国際大学、琉球大学が立地し、沖縄コンベンションセンターが整備されるなど、県内の高次都市機能の一部を担う重要な地域となりつつあります。